
異世界でお医者さん目指します。

ヤマタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でお医者さん目指します。

【Nコード】

N8859Y

【作者名】

ヤマタカ

【あらすじ】

病で死に、次に転生した先は魔法とファンタジーの世界だった。前世での記憶があるアルトは、その知識を生かしながら前世で自分を死に追いやったそれと唯一闘える職業、『医者』を目指す。

けれど、彼の周りには天才画家や最強美人など、奇怪で変人な連中ばかり。しばしば騒動に巻き込まれたりドタバタしたりはするものの、ほのぼのとマイペースに医者への道を歩いていく、ほんわか異世界物語。

この小説は、主要登場人物が主人公以外、ほとんど女の子と

なっております。そういうのが苦手な方はご注意ください。

お医者さん目指します

急性硬膜下血腫。

頭蓋骨の内側で脳を包んでいる硬膜と、脳の間に出血がたまって血腫になったもの。

何かよくわからないが、そんな病気で俺の生涯は幕を閉じた。高校三年の秋だった。病気でぶっ倒れた時は「ああ何でこんなこと」と散々悔やみ泣き絶望し……。色々あったものの、いざ死ぬ直前となれば「いい人生だった」と年甲斐もなく悟ったものだ。

そんな、前世だった。

転生……といえば聞こえはいいが簡潔に言えば来世。俺はまったく違った世界で生まれた。

そこはよくゲームで遊んでいたファタランジーナな世界で、魔法や騎士、ヨーロッパ顔負けの幻想的なもの。城壁が都市をぐるりと囲み、その中で国を治める王様が民を守り、また導く。

国の名はザヴェード。

約百年前まではこの世界で大地を二分するアシュランと戦争（冷戦ともいえる）状態であったが、何人かの集団によって協定が結ばれる。たった一つの集団に？ おいおい、そんな非現実的なことあるわけないだろう。戦争を終わらせたんだぜ。十中八九、何かしらの要因があるのだろうが、それを知る方法や術は当然ながら俺にはない。

今思えばこういう疑問が当然出てくるし、その答えを知ろうとも思うのだが、結果として世界が平和になったのは事実であり、何だかそれを探るのも野暮なような気がする。特に問題もない。知りたいたとは思うが、死ぬほど切望していることでもない。そんな世界の

概要を知ったのも……俺が五才の頃。

丁度、前世の記憶を取り戻した時期と同じ。

高熱を煩って、三日三晩寝込んでいると、夢の中で前世の物語が段階的に始まって……一日一章ずつの全三章構成だった。誰が作ったんだと突っ込みたいが、まあ記憶が戻ってしまっただのなら仕方ない。最初は変な夢だなと思ったけど、最後の三日目。

一気に前世での生涯全てが身体全体に入ってきた感覚になった。上手く表現できないんだけど、寝ている自分の中に光る粒子がフワアアと流れゆくもの。そうして、前世での記憶がはつきりとありながら、俺は今を生きることになった。

あつちの世界では悲しい最後を迎えていたが、こつちの世界ではそんなヘマはしない。

何故かって？ そりゃ……ね。

自分、お医者さんです。

王都ザヴェードの中にある一軒家、『シャーロック医院』の一人息子。

それが俺こと、アルト・シャーロックだ。仲がいい人からは「アル」なんて呼ばれてる。

記憶が戻ってから十一年。現在十六歳。

正直言えば、何度かあつちの世界でのことも想った。それは確かだ。今の生活からしてみればそれはもう凄くて、超技術にして未来的だ。ネットで毎日動画や海外のニュースとか見ていたあの頃を懐かしく思う時もあるさ。

けどね、けどさ。

こっちも負けてらんないぜ。ゲームの世界だけとっていた、科学ではまず解明できないだろう『魔法』。王国騎士。西洋の景色や街並み。何百というギルド。

前世では将来設計や周りの目とか、そんなある意味息苦しいとさえ思えた毎日が、ここにはない。あるのは今この時を楽しく、刺激的に過ごすという人間たちの賑わい。そして己が野望や想いを成就させようと動く時代。

いいね、すごく。こんな世界も、あつたんだ。

だから、俺はこの世界が好きだ。あの世界を知っているからこそ、この世界が好きだ。

何より、今はやりたいことがある。目指していることがある。

俺の生涯を終わらせた病。それと戦うことが出来る唯一無二の職業。さらにはそれを目指すのにこの世界では『魔法』とかいう常識が付いてくる。それもこれも、俺の努力次第ってなもんさ。やらないわけにはいかないさ！

さつきも述べたけど、幸いこの世界では丁度戦争がなくなった。戦争に駆り出される心配もなく、自分のしたい道、やりたいことに一生懸命猛進できる。そういう環境が整った世の中。やるかやらないかは、自分が決める。決められる。

「いい天気だなあ」

そう言って、二階にある自分の部屋の窓を開けた。朝日が眩しく身体をつつむ。

ここ数日雨続きだったけど、どうやら今日は晴れのようだ。天気

予報がない今だから、その日その日で天候がわからないってのこの世界ならではか。

めでたく二回生となった俺が迎えた、最初の学期試験も無事終えて。

今日は現在俺が通っている医術学校の、年に三回ある試験のうち、一番目の試験が終わった翌日。一回生の頃は結構しんどかったけど慣れてくると案外大丈夫だったりする。普通の学生ならこのまま学校へ行く準備をして向かうのであるが。

俺の場合、ちょっとした朝の通例があるのだ。

「アルト！ 起きてるならユナちゃんのところに朝ごはん持って行ってくれるー？」

「はいよー」

そう。

あいつに、彼女に朝食を持って行かねば。

その子は、ザヴェード王国随一の画家にして、俺の幼馴染。どうい子かって言うと――

「アルト！ 起きてるなら返事しなさい！」

「さつきしたじゃないか！？」

ああ、もう。さつさと行けばいいんだろ。父さんとは違って母さんは短気なのだ。

すぐさま一階に降りて彼女の朝食であるパンとスープ、それにレタスを持って（あれ？俺のがない）家を出る。そこは城下町であり、人々の生活の場。

小さな子供たちがふざけ合いながら学校へ行く姿。馬車に乗った貴族が遠出するのかガラガラと道を下っていく姿。新聞屋である二

コルさんが自転車でパフォーマンクスしながら新聞を配る姿。美味しそうなマフィンを路上で売買するおばさんの姿。

一人一人、今を生きる人々。俺も例外なく、その一員。

「わるくないね」

うちの家から道を挟んだ向かいに彼女の家は建っている。

家を出ればすぐ目の前だ。別に俺が持つていく必要はないんだけど、俺じゃないと彼女は拗ねてしまう。天才と呼ばれているのに、中身は意外と幼いのである。

馬車が通り過ぎた後、ニコルさんに手を振って、マフィンを売っているおばさんに一礼して、俺はその家の扉を開く。合鍵は常備持っているので大丈夫。……あいつが鍵閉めたことなんてないけどね。俺がいつも閉めているんです。無用心すぎるだろ。

そう思いながら、扉を開ける。これも一つの日常に過ぎない。

けれども、前世の記憶がある俺にとっては毎日がとても新鮮で、面白いもの。異世界にて、医者を目指す青年の、どこにでもある、

平凡な物語――

……だといいな。

天才画家

ラテン語で絵のことを「ピクトウーラ」と言うそうだと。英語の picture の語源でもある。

前世での記憶もかなり曖昧なれど、たまに役立つときもまああるもので。何故、そんな話をこんな異世界でするのかというと、意外や意外。不思議と世界は繋がっているのかもしれない。

この世界で、「画家のことを「ピクトウー」と呼ぶそうだと。正直驚いた。

んで、ある少女のことを敬意を表して“ピクトウ・レックス——画家の王”と総称している。誰のことか。決まっている。うちの向かい側にデデンと建っている家に、一人で暮んでいる我らがザヴェード王国随一の天才画家。

ユナ・L・サルジェリアである！

「起きろよ、天才」

「……あー」

埋もれている。正確に言えば下敷きになっている。

キャンパスに絵の具、模造紙にバケツ。色紙と水彩用紙に、筆に折りたたみ椅子。スケッチブックに帽子にバッグに水入れに水筆に布切れに固形絵具に本に辞書にコップに皿におやつにパンにスカートにダウンにランプに……あれこれ他多数。

ここ一週間、俺は医術学校の専門試験の最中であつたため、朝と夜（昼は食えない主義らしい）は彼女の家の扉を開けてすぐ下に食事を置き、そのまま全力疾走で学校に行っていた。母さんがいつもそれを回収するのだが、昨日から何故か食べた形跡がなかったらし

い。

食べなかったのではなく、食べれなかったのだ。

「いつも通り、ここに朝食置いてさっさと帰ってもいいんだが？」

「あー。あー。あー。……あ？ おお？ その声はもしかしてアーちゃん？」

「もしかしくなくても、そうですが」

「おおお！ アーちゃん、アーちゃん！ 助けて、今にも死にそうなんだよお！」

埋もれている残骸の下から、その女の子は精一杯の声で助けを求める。

「一日何にも食わずに生きてるんだ。別に助けなくても大丈夫ですよ」

「うん、まあそうなんだけどね。別にこのまま一人で死んでも特に問題ないかなあと思っていただけだね。でもね、でもさ。今ボクの近くにいたのがアーちゃんなら話は別だよ。ボクが世界で一番側にいたいアーちゃんがいるのなら話は別さ。ああ、アーちゃん。今ボクはすっごくここから抜け出したいよ。迅速に的確に今すぐここから飛び出したいよ。でもね、でもさ、アーちゃん。えとね、何故かボク、抜け出せないんだ。何でだろう？」

とても一日中飲まず食わずの女の子のテンションとは思えないほど、彼女の口は元気だった。

まあこれだけ体力や気力があるのなら、あと数日はもつのだろうが、ここで俺が帰ってその反動で自殺されても困るので、やれやれとばかりに埋もれている彼女を救助する活動を始めた。

ついでに、一週間ぶりに部屋の掃除と床拭きもかねて。

余談だが、救助中も彼女の口は引つ切り無しに話していた。

「やほやほ、元気だったアーちゃん？　ここ一週間全然会えなかったけど」

「学校の試験中だったんだ。ユナの健康状態も気にはなっていたけど、まさか埋もれているとは思わなかったよ」

「うん。ボクも埋もれちゃうとは思わなかったよ。ふと食べ物に絵を加えたらどういふ作品になるのかなあ、なんて思ってたらいつの間にか埋もれちゃってて。困ったね」

「俺はお前の思考に困ってるよ。何だ食べ物に色加えるって……。

あとさ、いい加減」

「ん？」

「『それ』止めないか？」

「嫌。じゅーでんちゅー」

現在、目下。

ユナは俺に抱きついている。抱き憑いている。駄き付いている。彼女の紹介については、もう特にする必要はないだろうか。たった今お送りした一連の流れで充分であろう。ユナ・L・サルジェリア。ザヴェード王国随一の天才画家なのだが、中身はかなり変わっている。同じ十六歳とは到底思えないほどの人格者である。

（本人が長いと邪魔という理由で）髪はショート。色はエメラルドで、瞳も同じだ。

画家ということもあり、服装には常に絵の具やらペンキやらがべったりくっ付いており、逆に可憐なドレスやワンピースを着ている姿はまず見たことがない。最後に見たのは、四才ぐらいの時か。

彼女は、一人暮らしである。

理由としては、この世界ではよくある話で両親が出稼ぎしている

最中に崖から転落死したというもの。盗賊や野犬に襲われなかっただけマシなのかもしれないが、五才の誕生日を間近に控えた彼女にとって、その事実は衝撃的なものであった。両親の死を聞かされた瞬間、ユナは卒倒し意識不明に陥る。そして、二ヶ月後奇跡的に目を覚まし、一心不乱に絵を描きたいと言い出して、初めて描いた作品が……。

現在、ザヴオード城の大広間の中央に飾られている。

タイトルは、『ノウス』。意味は『今』。

光と闇を半々に分け、見る人によつてはどちらにでも解釈できる至高の一品。描いた彼女に実際はどちらなんだと聞くと、彼女はどちらでもないと答えた。これにより、ますます『ノウス』に対する画家たちの議論は過熱していく。

だが、実際は彼女にとって本当はどちらでもない。というものはなく、どうでもいいが正解なのだ。

ユナは自分が描いた作品が完成すると、それは意味がなくなつたと解釈し、過去の遺物として処理する。ゆえに、その作品がどうなるかと、どうあるかと、どう見られようと、特に興味はない。

そして付け足して言えば、『ノウス』が現しているのは光でも闇でもなく、悲しみである。それに気付けない自称お偉い評論家たちは全員阿呆だと思う。ユナだって一人の女の子。それを考えれば答えは一つしかないだろうに。

「アーちゃん……」

「あ、ごめん。怒った顔してた？」

「うんにー。そういう顔も好きだからいいよー」

そうして、彼女の身柄はユナの両親の親友であつた俺の両親が引

き取ることになったのだが、噂になった『ノウス』を国が買い取る
と言い出して、莫大な賞金が彼女に手渡されたため、現在彼女は一
人で何不自由なく暮らしている。

が、やはり。金があっても動こうとはしないので、こうやって生
活に関する面倒はうちが見ているのだが。メイドでも雇えばはるか
にいいだろうに。

と、いうわけで彼女についての概要は以上である。

まだまだ説明、補足したいところもままあるが、それはゆっくり
と付け加えていきたい。

なにはともあれ、彼女が俺の周りにいる幼馴染にして変人。

天才画家こと、ユナ・L・サルジェリアである。

「えっちいこと、しよ?」

「却下だ」

よし、学校行こう。

最強美人

朝日に照らされながら、ユナの家の前で俺は背伸びをする。

「相変わらずアーちゃんは努力家だね」

「そうでもないさ……」と。よし、そんじゃ行ってくるか。多分、今日の昼頃にマードラさんが来るから。描き終わった絵画、ちゃんと渡しとくようにな」

「うい、了解だよ。今日も勉強、行つてらっさーい」

「ああ。行ってくるよ」

そう言つて俺はザヴェード医術学院に向かう。

ザヴェード王国は、四方八方十六方、グルリと城壁に囲まれた国の要塞だ。門は東西南北に存在する。外から門を通り中に入れば結構な深さである堀が見えてくる。当然そのまま落下するわけもなく、橋が架けられていてそれを渡っていく。そうしてようやくザヴェードへ入国することが出来るのだ。

戦時中であつた王国を守るために建設された国という名の守り。今となつては『もし反乱があつた場合』のためという理由でその要塞は意味をなしている。

北西の方角に向けて地面は盛り上がつていく構成となつていて、その一番上にお城がデデンと聳え立つ。お城からはさぞかし眺めがいい景色なのだろうなあ。一度見てみたい気もするけど、そうそう城に入る用事などない。貴族ならまだしも、医者俺では到底……と、いうわけもなく。

実は私、只今そのお城に向けて歩いていつているのです。理由はもちろん、城の領地内部にある学校に行くためで。

「相変わらず豪勢な学校だ」

王国内にある、ザヴェード城領地において、東に位置する土地は全てこれの敷地内とされる。ちなみに、西は騎士学校で、南は魔法機関。そして残りの北の範囲内を城やら貴族街やら色々ある。

医術と、武術と、魔法と、城。それがザヴェード四大箇条である。この四つがあつてこそその国が長きに渡り繁栄を守り続けてこれた理由だ。もう一つの大国、アシユランは魔法に対する研究を最近弱めて別の何かに力を向ける動きがあるそうだと、マーデラさんが言っていたな。何をするかは知らないけど、それが国のため、世界のための動きとなればいいなとちょっと思っていたりしている。

あ、余談だがマーデラさんは軍人の方。主に経理部門の方で、その仕事の一つがユナの絵画確保だそうだ。ユナの絵はザヴェード中で人気だから国が責任をもって保管しているらしい。すげえ。

そうこう思っているうちに校門へ到着。

現在俺は全五回生ある中の、二回生。ようやく一年を通して医術学校に馴染んできたところだ。最初の一年はそれはもう大変できつかったのを憶えている。けれど、やっぱり人間は環境に順応するもので一年すればもう慣れてしまった。

が、一回生はそうも言つてられない。つい先日まで初めての試験だった彼らは今日お休みである。理由は年に三回しかない試験の一つを受けた彼らに休息を与えるため。最初の試験ぐらい、ゆっくり休ませてやろうという学校側の計らいである。

そんなわけで、今日は二回生から五回生までの登校となる。門をくぐり、『フォトン』と呼ばれる虹色の並木道を通りながら歩いていく。医術学校と言っても試験の合格点さえ出せば次回生に

進級できる制度で、最低限の素行さえあれば服装やら人格を問題視されることはない。

つまり、結構フリーダムな輩が多い。

でもしかし、一応入学試験というのもあってそれに合格できないと当然入れない。しかも結構難しいんだなこれが。倍率は……えと、大体毎年四百倍だっけか。歴史あるザヴェード王国直属の医術学校。しかも階級、出身問わずの完全能力・結果主義をモットーとしたこの世界では考えられない制度だ。

階級・出身がすごい輩は大抵『そっち系』の学校に行くしね。そんな一般人からやや外れた連中が集う学校であって、暇になることもないし何気に楽しかったりする。

虹色の花が彩る、並木道を歩いていると中道にドーンと存在感全開の像が見えてきた。

いわゆる、前世でいうと『初代校長の像』だ。もう随分と昔っぽいらしいがその姿はまさに学生たちの鏡。それらしい帽子を被って右斜め四十五度って感じ。いやあ、どの時代でも同じなのね、こういうのは。ちょっとだけ親近感湧くよ。

「いっつも俺らを見守ってくれて、ご苦労さん」

そんな、柄にもないセリフを言いながら、光を反射する眩しい像へ微笑んで。

鼻歌片手に像を通過。すると、何故だろう。足元を風が速く通り過ぎる……ハハッ、これはあれだな。俺の柄にもないキザなセリフに初代の校長が照れちまったか。

まったく、女子にするならまだしも男の俺って。

クルリと振り返り、心の中で『おいおい』と突っ込みを入れた俺の目の前で。

像の頭が吹っ飛んだ――

「……………おお」

つい、そんな感嘆な声を上げてしまう自分。見れば、初代校長のキラリと輝くその頭部は今や跡形もなく消し飛び、さながら首無しと言ったところであつた。

――って!?

「なんじゃこりやああああああ」

「おお、やつぱアルトじゃん！　よかったぜ、上手く止まれて」

止めれて？　止まれてだと!?

どこをどう見れば校長の頭がなくなったことで止まれるんだよ！
ったく……さっき吹いた風は校長像の恥ずかしさじゃなかった。
きつと、助けてくれと俺に言いたかったのだろ。すまん。

「もう少しマシな登校は出来ないのかよ、お前は」

「ははん。それは無理だぜ、我がライバル」

数秒遅れて、着地。どうやら蹴り飛ばした後はそのまま空中にいたらしい。

降りたつた場所は当然今や無き像の頭付近。なんと罰あたりな。なんと豪快な。なんと変態な。

オレンジ色と黒色の、かなり目立つ髪型をなびかせて、その女は俺を見下ろした。

「おはよん、アルト」

「……おはよう、ララ」

ザヴェード医術学校、二回生主席。歴史ある医術学校史上『最強』と目される女。

ララ・アディエマスの登場であった。

出会いの予感

「しっかし、今日はいつもの二百倍『暇』だぜ」

「お前が暇じゃない日なんてないだろ」

「ははん、まあね」

ララ・アディエマス。オレンジと黒の髪。肩ぐらいまである長さでその色も然りであるが髪質もかなり綺麗。彼女の横を通り過ぎた人間は性別関係なしに無意識に振り返ってしまうほどだ。

身長もほぼ俺と同じで足も長く、一言で言うなら『かつこいい』。自信に満ち溢れ態度や言動からもそれが伺える。物怖じしない精神に即行動の実行力。彼女のファンクラブもあるらしく現在もその数は上昇中。特に下級生である一回生からはカリスマ的存在になりつつある。が、俺からしてみればただの我儘で自己中な女だ。

ただ、彼女の成績は他の生徒とは桁が違う。『最強』『化け物女』『生きた魔王』『女帝外道』『主席』『天才』……その他もろもろ。最後辺りは尊敬の念を込めて言われているが他はどれも畏怖や皮肉を形容されて呼ばれている。

彼女は、まさにそれなのだ。

全、十二科目ある医術学校のカリキュラムを、全て彼女は満点の「S」判定。前代未聞の快挙を成し遂げた。ちなみに、ランクは上から順に「S・A・B・C・D・E」の六段階で存在する。Sはもうほぼ完璧というやつで「文句なし」という意味。残りのA〜Eは試験の上から順につてやつだ。Sをもらえただけで学年内では注目されるのに彼女は十二科目全てにSランクをとってしまった。

注目されないはずがない。

一応補足させてもらえば、三回生より五つ増えて十七科目となる。二回生までは基礎と標準クラスを受講するのだ。こういうところを見ると、なんだか前世での大学の仕組みと何ら変わらないから面白いな。

「で、ララ。試験の方はどうだったんだ？」

「それをあたしに聞くかよ我がライバル。なもん決まってんじゃん、満点だろどうせ」

「……（どちくしょう）」

本当、こと試験においては天才だからな、こいつ。まるで試験に出る内容を最初から知っていたみたいに。ただ、試験は実施試験もあるからそこではカンニングなど不可能。やはりララの根底よりある才能がそれなのだろう。才能という言葉だけで片付けるのは癪だから絶対に言わないけど。

なんか納得できないし。

というか負けた気分だし。

「で、アルト。全く同じ質問をお前にするけど『試験の方はどうだったんだ？』」

「ん！？ あーまあ。よ、余裕だったぜ」

「筆記試験、終わった後お前死神みたいだったか」

「……」

この女、ちゃっかり見てやがったな。

確かに、実技の方は実家が病院やってることもあって小慣れている。まだ二回生というのもあってか突っ込んだ実技には入っていないし、そういう点では俺は他の生徒よりも有利だ。ただ、如何せん

筆記の方が問題で……。

前世の世界と、こちらの世界との医学の常識がかなり違うのだ。たとえば、鋭利な物で傷を負った場合、近くに病院などが無かった時に傷口をどのような対応で治せばいいか。という問題がある。前世では『オキシドール』で消毒、もしくは『水』で洗うというのが普通だろうが、この世界での模範解答が以下の通りである。

近くにある薬草『キュラ』を潰して揉み、汁を抜き取る。そのまま残った葉を下級創作魔法“チタカ”でガーゼに変える。同時に、下級水術魔法“ウォル”で傷口の菌を洗い流し、その上からキュラの汁とガーゼをかぶせる。なお、医術魔法が使える者は“ウォル”で洗い流した後に下級医術魔法を使用する。両方書けて正解。知らねえよ！

悲しいことに、前世の記憶はまったく齒が立たない。というか水さえも自分で出せとか洒落にならん。一応この世界の住人だから魔力はあるし魔法も扱える。だが肝心の『常識』が天と地ほど違うのだ。

さらに、医術以外にも教養として歴史や地理、文学も勉強させられ、その点において前世での記憶がかなり邪魔をすることになる。今まで当たり前と思っていた勉学での知識がポンツと不必要になったような……そんな感じた。

「だから入学試験の際は苦労したなあ……」

「ははん？ 何遠い目してんの？」

「いや、別に。ああ、そっぴや明日試験結果が張り出されるけど、確か一回生でちよつとした騒動があつたつて噂になつてたぞ。内容は知らんけど」

「よくぞ聞いてくれました！」

……いや、聞いてないけど。

俺が何気ない噂をポツリと言うと、その言葉を待ってたばかりにララがふんぞり返る。両手を腰に当て、同じ年齢としてはつい目がいってしまふ豊満なバストをググツと前に押し出してえっへんのポーズ。本当に彼女が最強やら化け物やら何やら言われているのか疑問視してしまう光景だった。

ただ、そんな俺の平凡極まりない感想を吹っ飛ばす発言をララが放つ。

「お前と一緒にのやつが出たそうだぜ？」

「！？——マジか」

「ははん、やっぱ気になるか。まあ確かにそうだよな。普通百年に一回程度だから」

「ってことは」

「おうよ、北の『ジャルトオ』地方から来た子らしいんだがよ。見事に一回生が受ける十二科目の一つ、『介護森羅』で……【Z】判定。叩き出したそうだね」

【Z】判定。

その言葉の意味なら、この学校内で特に知っている。知り尽くしている。何故なら俺もその判定を去年受けたからだ。六つの判定の中で一番上のSは、最上位のランク。文句なし、ほぼ完璧という評価。

しかし、もう一つ上のランクが存在する。

それは、『不要』というランク。判定を受けた者は、その科目に對し、もう授業を受ける必要がないというもの。

俺が、一回生の頃、十二科目の一つである『手術』で受けた判定と同じ。

虹色の花びらが舞う中で、新たな訪れが始まろうとしていた。

総会

普通なら、ここで次の日って流れたがそうも言ってられない。

一回生から五回生によってカリキュラムは全然違い、さらに年によってやることも変わってくる。何だかんだで五回生は卒業試験があるし、四回生も来年に向けて本腰入れてくる連中も多い。

実際、比較的自由なのは二回生と三回生である。

今日も実は用事があるのだ。

「——そう言えばララ、担任に総会へ立候補しないかって言われてないの？」

「随分前から言われてるがしないよ面倒くさい。あたしは自分のしたいことが出来ればそれでいいしね」

「自分のしたいことが医術って結構変わってるけどね」

「だってよく、多分何もしなかったら公爵家の仕事させられんのがオチだもんよ」

言い忘れていたが、実は彼女はザヴェード四大公爵、アディエマス家の次女である。

王家の次に権力がある家柄であるが次期当主は長男が、舞踏会の式典を催したりする公爵家らしい仕事は長女の姉がしているそうで、実際彼女はやることがない。

多分このままいけばどこぞの男と結婚させられて優雅な貴族ライフになるそうだが、この性格に加え完璧超人な彼女のことで。そんな人生お断りといったところだろう。だからこうして学校に通い、牽いてはララ自身がやりたいことを実現させるつもりだ。

結婚は、まだ考えたくもないらしい。というか、理想の男がいならしい。

「そういうアルトはどうなのよ？ 総会からお呼びかかってんじゃないの？ 何せ【乙】判定所持者だろ」

「十二科目あるうちの一つだけだ。残りの成績は大してそこの生徒と変わらないし、推薦を受ける身分でもないよ」

「ははん、やけに後ろ向きじゃね」

「俺は無事に卒業できればそれでいいの」
「まったく、つまね男……っと！」

彼女がぶつくさ文句を言おうとした、その時だった。
上空を何かが通り過ぎる。それは、鳥でもなく雲でもなく……そんな、小さなものではない。

黒。鉄。煙。

煙突より立ち上る煙が今日も元気に空を翔る。煙を出す煙突を掲げ、それはレールのない空を豪快に走りゆく。ザヴェード医術学校名物、『魔空機関列車』である。通称、魔車。

遠くに住んでいる生徒の送り迎えを主な役割としている。

シュシュシュと小気味よい蒸気音とともに、まるでそこに道があるかのように回転する車輪。魔法と魔法の重ねがけを何十もの複雑構造に展開し、かつ半永久的に汽車へと組み込んだ特級創作魔法。約百年前に戦争が終結した際、ふらりと現れた正体不明の連中が生み出していったといわれているが……詳細は不明なままだ。

ただ、その魔法は尋常ではないほど強く、列車を定期的に清掃、修理さえすれば永久に稼働させることができる。煙突から生み出される煙も色は黒だが外の空気に触れればすぐさま無害なものへ分解されるそうで、なんとなく……俺が前世にいた世界の奴らが考えそ

うなことだと思った。

うん、それはない、と思う。でも、俺に前世の記憶がある以上、ありえてもおかしくない事象。

「考えても始まらない、か」

「そうだぜ。今日は総会の奴らとご挨拶だからな。考えても意味ないさ」

「そついうのじゃ……。ま、いいや。魔車が通り過ぎたつてことはそろそろHRが始まるな」

「ははん、そだね。じゃ、またなアルト」

「ああ、またなララ」

超人たる身のこなしで、お前絶対貴族じゃないだと突っ込みた
いほどの俊敏さで彼女は去っていった。全部で九クラスある二回生
だが、当然ララは最上クラスの一組。当たり前か。

ちなみに、俺は中の中である五組。

一回生の時は六組だったからちよつと上のクラス。このまま来
年は四組を目指したい。

そんな、平凡かつ悠長な考えで今後のことを妄想する俺であった。

総合医術管理生徒委員会。通称『総会』。

四・三・二回生からそれぞれ二名ずつ選出され、合計六名の委員
会。主に医術学校の代表として事務や学校行事を先導して行ってい
る。一回生はまず最初の一年を慣れるという理由で席はなく、また
五回生も卒業で忙しいからというものだ。

で、その二回生からの選出が、今日。

HRが終わった後に、前世でいう多目的ホールに似た場所へ二回

生が集められた。

「アルト、お前やっぱ立候補とかすんの？」

「しないよ。ってか何で皆俺にそればっか質問するの？」

「そりゃあ【Z】判定所持者だしな。やっぱ俺らの代表となればお前が妥当じゃね？」

「うん……」

確かに、もし俺が他の生徒と同じ立場だったらそう言うかもしれない。

事実、ララに対しても最強・天才だから総会にいそうなイメージだし、さっきも立候補するのかと聞いてしまった。当然、友人の一人にZ判定の所持者がいたら彼がした質問も頷ける。

ちなみに、医術学校は男女の割合が7：3だ。

看護婦を目指している女子はこの学校の姉妹校である看護学校があるので、俺が通っている学校に来る生徒はほとんどが医者志望。もちろんジャンルは違ってくるが。ララは外科医・内科医何でもござれだけど、普通は生徒一人一人に目標があるからね。

今俺に話しかけてきた男は産婦人科希望だが……。いや、やましい気持ちはないよ。うん。

そうこうしているうちに、入り口付近にいた生徒がざわめきだした。

同時に、各所でひそひそ話も始まっている。

「皆さん、ごきげんよう」

見ると、さっきまで一人もいなかった壇上の前に四人の生徒がいた。

まったく気配というか、人がいた感覚がなかったため、辺りはち

よつとしたパニックになる。いや、いきなり人が現れたら誰だって驚くしな。

「あらあら、このぐらいで動揺しては医者としての才能がないのかしら」

……途端、静まり返る場内。さすが、多人数を操作するのに慣れてらっしゃる。

同時に、彼女の美しさにも目がいったが……ふむ。今日はあれか。

「では、さっそくですが総会・二回生に対する説明をしようと思いますが、そうですね。やはりここはさっぱりくつきり言った方がよろしいでしょうか」

彼女が、壇上に立った時から、ずっと、ずうううつと俺を見ていた。

視線を一切動かすことなく、逸らすことなく、一直線に、ただただ俺を見ていた。さっきも思ったが、やはりあれだな。ララによって校長の頭が吹っ飛んだ時から薄々感じていたが――

「アルト・シャーロック。貴方を総会メンバーに推薦します」

今日は、厄日のようである。

問答の先に

——え？

全員が、その場にいた全員が同じ感想を抱いた。

対し、壇上に立つて終始笑顔の彼女はとても楽しそうにしていた。

「俺？」

ズザツと皆の視線を感じる。同じクラスの連中も、違うクラスの連中も、遠くにいるはずのララも。

誰も彼も生徒も教師も、一様に俺を見た。

「ええ、そうですよアルト・シャーロックくん。私は……いえ、総会は貴方を是非とも推薦させていただきます」

「え、いや。しかし」

「何かご不満でも？」

「ちよつと待ったー！！」

俺と彼女の会話に、大声で介入してきた女性が一人。言うまでもなく、最強と呼ばれる女である。

ちょうど五組が真ん中に並んでいるためか、彼女の声が端の方より聞こえてくる。しかし、それでも彼女の声量はなかなかのものでおそらく反対側の九組にも容易に届いているだろう。

と、そんな俺の考えを他所に、堂々と威厳ある歩きでララが前に出てくる。

「アルトが入るならあたしも入る！」

「あら、何故でしょう？」

「我がライバルだからだよ」

「……どんな理由だよそれ。というか、そもそも何故俺が推薦されなければならいんです？」

「随分と安易な質問ですね、アルト・シャーロックくん」

安易とか言われた。ショックだった。

「推薦された理由など、貴方が一番よくわかっていると思うのですか？」

「……【Z】判定、ですか」

「ご名答」

あゝあ、やっぱりか。ほんと面倒なことになってきたなあ。
と言っても、結論は決まってるんだけど。

「お断り、します」

「即決ね。もしかして推薦されるかもなんて考えていたのかしら」

「まさか。そこにいる最強女にも同じこと言われたから、俺も同じ返答をしたまでですよ」

総会。正式名称、総合医術管理生徒委員会。

その各回生による代表の決め方は極めてシンプルで、『立候補』

↓『二人以上なら選挙』というもの。一応ながら推薦というものもあるにはあるが、大体それが行われることはない。

何故なら、総会に入れば卒業の進路は極めて優遇されるからだ。

もちろん、学校での成績も加味されるが実際は総会での活動を重視され、いいとこに就職できる。

それこそ、うちの様な自営医院ではなく、ザヴェード王立病院とか。そのまま研究者の道も開かれるのだ。推薦されるのを待つ必要もなく、やる気がある者は自ら立候補するのである。

実は、俺はこの研究者の道にもちよつと興味があつたりして……。前世でサヨナラした原因であつたあの病に似た、いわゆる不治の病に対抗できる研究がしたいのだ。

ただ、実家も継ぎたいと思つてるし、色々迷つてはいるんだよなあ。

と、そんな私情を入れる暇はないようだ。ここで言いたいのは総会が生徒にとつて、とても『魅力的』であるということ。おそらく、立候補しようと考えていた生徒も多かつたはず。通年十人ぐらいつて言われているし。

つまり――

「納得できません！」

ララの声がよく通る声ならば、彼女の声は怒号にみちていた。

彼女のことはララほどではないが結構有名だ。何せ我らが二回生の二番手、主席であるララの次の成績を獲得している才女。ミニ・ブリザス。名前は小さいが態度や性格は無駄に大きく、自信に満ち溢れた人格をしている。ララの場合は自信というより威厳かな。ちよつと似ているが全然違う感じだ。

そしておそらく、ここに来る前まではおそらく彼女が総会に立候補するだろうと皆が予想していた。兼ねてよりミニさんは総会に入るために勉強をしていたそうだ。自分の父親が元総会のメンバーらしく、それに恥じないようにと自分自身に言い聞かせているそうで。

「あらあら、何かしら。小さいお嬢さん」

「小さくありません！ いえ、それよりも、総会総長。この二人を

入れるというならば立候補するつもりだった他の二回生はどうするおつもりですか!？」

「辞退……に決まっているじゃありませんか。まったく、安易な質問ですね」

「どうやら、彼女は安易という言葉をよく使うようだ。皮肉的な意味を込めて。」

「っていうか、あの女、総会会長だったのか。……ま、凄い偉そうだから何となくわかるものだけ。身体や名前は小さいが精一杯の声量でミニさんは応対する。」

「そんな理由になりません! 私のような、総会に入りたいと思う生徒が立候補し、二人以上なら選挙というのが通常と聞いています。通過儀礼でもあると。だからこそ総会を望む生徒はこの日のために色々準備をしてきているはずですよ!」

「そんなもの小鳥の涙と同程度よ。ま、小鳥は涙を流さないけどね。あと、立候補↓選挙が当たり前みたいなこと言っているけど、所詮はそれ、『制度上』での話しでしょ? 私たちが推薦しては駄目……という決まりなんてどこにもないし、また貴方たちが必ず選挙して決めるなんてものも、決まっていな。つまりはね、小さいお嬢さん」

「――!」

「貴方、運が悪かったのよ。それだけのことよ」

あまりにも厳しすぎる総会会長の言葉に、ミニさんは顔を真っ赤にして押し黙る。

両手はギュッと握り締められ、プルプルと震えていた。

「ま、貴方の言い分もわかるけど、確かに可哀そうではあるけれど、『仕方ない』として諦めることね。同情はしてあげるから許して頂

戴。それでは、アルト・シャーロックくん？ 貴方を我々は歓迎するわ。今後の予定だけでも」

「あっはっは。会長、もうお忘れですか？」

「ん、何かしら？ アルト・シャーロックくん」

本当に何なのか聞いているその表情がまた美しく見えた。

第一印象はとても礼儀正しそうで振る舞いも一級。どこか品のある言葉遣いに優雅な立ち姿。そんな総会会長の彼女に最大限の誠意と、敬意を表しつつ、ニツコリと俺は微笑んだ。

「力の限り、遠慮します」

女傑麗嬢

「これで二回目、ですかね。最初にお断りと言ったはずですが。俺は総会には入りませんよ。特に興味もない。」

俺がこの学校に入った理由は至極簡単で、卒業すればもらえる『医者免許』のためです。あとは実家を継いで、時たま好きなことができれば最高ですね。医者免許は無事卒業できれば生徒全員に授与されるものだから別段、上位の成績を収める必要もない。

ゆえに、総会に入る必要もない。

さらに言えば、総会に入る気がない。

大体、俺は今のこの生活が何気に気に入ってしましてね、勉強しながらたまに城下町で友達と遊んだり遠出をしてやりたいことをやる。基本は医学の勉強をしながら。

しかし総会に入れば残りの四年間、ほとんどが総会の仕事に駆り出されます。それがいけないとか駄目だとかそんなことを言うつもりはさらさらないですけど、俺にとっては魅力的なものではないです。ましてや、その総会に入ってやりたいこともないですし。

ですので、総会に入りたいと思う人がいたらその人を最大限応援したいし、それが当たり前だと思う。ま、普通がそれなんですがね。いきなり現れていきなり推薦ってきていきなり進めていかれても、こちらとしては困惑するってなもんです。

というより、迷惑です。

あ、そうだ。もう一つありました。ん〜、まあこれは俺自身のもので、正直若いなと苦笑してしまうんですが、もう一つありました。何となく、なんですけどね。

貴方のやり方、好きではない。

だから、総会には入りません。入る気もありません。入る以前の問題です。

以上になります。満足してただけましたか？ 会長さん」

「若いな」

「若いねえ」

屋上の風を受けながら、ぼお〜と突っ立っている俺。その横でニヤニヤしながら俺を見るララ。

現在、俺とララは屋上にいて、二人で黄昏^{たそがれ}ている。辺りは夕方の光、赤かオレンジか判断のつかない夕焼けの色合いで包まれている。時刻は夕刻。

学校の屋上より、生徒たちが談笑しながら帰って行く。あと数十分後には、魔車が生徒を乗せて夕空に向かって出発するだろう。

「いや〜、正直あんなこと言うとは思わなかったよ、あたしや」

「何おばちゃん言葉になってんだよ。……うわ〜、思い出しただけでも恥ずかしい。厨二病全開だった」

「ちゅうに……？ 何か知らないが、ま、結構かつこよかったよ？ 結局あのは当初の予定通りって感じで進んだじゃん」

そうなのだ。俺が喧嘩上等の態度でペラペラ話し終えると、意外

や意外、会長は「あらそう」とだけ言い残し去っていった。その後を残りの総会メンバー三人も続き、場内は静まり返る。

慌てながら、担任の先生方は総会の立候補を募るけれど、誰も手を挙げず。

そりゃそうだ、と内心思っていると数秒後、一人だけ勢いよく手を伸ばした少女がいた。

先刻、会長にボロクソ言われた彼女だった。

半泣きではあったけれど、まだ身体は震えていたけれど、はつきりと彼女は手を挙げていた。

それを見た生徒たちが、やや遠慮しながらも、もともと立候補する予定だった生徒が手を挙げ始める。そして当初の予定通り約十人ほど立候補が出たため、選挙となった。

当選したのは、もちろんミニさん。あともう一人当選した女の子がいた気がするけど、憶えてない。何せ自分の言った言葉がグルグルと脳内再生されて終始赤面状態だったから。オレンジと黒の髪をいじりながら遠くを見るララ。

「しっかし、あの会長もすげえな。普通、あんな女はこの学校にはいないぞ」

「お前が言つかよ最強。ただ……正直、俺も驚いたけど」

「だろ？ 医術学校の女なんざ、大抵物静かなやつか、ミニみたいな元気印のどつちかだぜ。あたしは例外として、あの会長は相当イレギュラーな部類に入るな」

「名前、知ってるか？ ララ」

「ん？ えと、確か何だったかな……ソリヤ、だったか。ムラムラ、だった気も」

「イリアよ。ララ・アディエマスさん」

——突然、後ろから声がした。

振り向けば、そこに立っているのは一人の女性。この際、ララが言った「ソリヤ」や「ムラムラ」には突っ込まないで置こう。

が、正直驚きは別の方向にある。彼女がここに立っていることよりも、どうやっての方が驚きだった。つまり、屋上に行くには階段から登り、屋上へと続く『扉』を開かねばならない。結構重みがあるって風や雨の原因で風化しており、開ける際には必ず錆びれた音をするのだ。

けれど、扉の音はしなかった。

というより、扉は閉まったままだ。俺とララが来る際、しっかりと閉めたはず。

つまり、『開けていない』ということ。さらには、あのララが今まで気付かなかったこと。身体能力が通常の倍以上あるララがある。いや、それよりも。イリア……だっけか。どこかで聞いたことがあるような。

「おいおい、あたしが気付かないなんて会長さん、何者よ」

「あら、そんな安易な質問、答えるまでもないわ。普通のことよ」

「いつからそこにいたんですか」

「それも安易ね、アルト・シャーロックくん。ずっと、よ」

……こえー。マジこえー。

前世でいうストーカーじゃないだろうなこの人。やだなあ、俺。モテモテじゃないか。勘弁してくれよ。最強女に生徒会長とか確実に死ぬる。我が幼馴染の天才画家に知られたら確実に殺される。

そう思いながら相對する彼女を見ると、ふと知り合い……というか幼馴染の一人である騎士令嬢が言っていた言葉を思い出した。

「私の学校の生徒会長が不思議な人だな。何というか、掴みどころ

がないのだ。いつも淡々としているのにどこか余裕があるというか」

「へえ、シエリー。その人、名前何て言うんだ？」

「うん、確か——」

……いやいや。

いやいやいやいやいやいや。

それはない。え、ていうかおかしくね。ありえなくね。何で、えと、ん？

「あー、そつか。お前『あたしん家と一緒に』か。道理で超偉そうな態度なわけだよ」

「ん、その納得は的を射ていないわねララ？アディエマスさん。私は家が例え庶民出身でもこの性格よ？」

「ははん、それはねえよ。それはありえねえよ。だつてお前、姉ちゃんと言つてた……えと、何だったけか。そうだ、あれだよ」

「何かしら」

一息ついて、ニツコリと微笑む総会会長に対し、ニヤリと笑うララはこう言つた。

「形式上不可能とされた『二股両学』を成し遂げ、さらにザヴェーロ歴史上、初めて騎士学校と医術学校、両方の会長を受け持つことに成功した麗女。四大公爵・ワグナルト家が長女。あたしらじゃ『女傑麗嬢』とか言われている女……」

「光栄ね」

「イリア・ワグナルト！」

夕日が包み込む屋上で、イリア会長は満面の笑みで俺らを見る。対し、俺は彼女が夕日に包まれている姿を見て、こう思った。

……やっべ。超帰りたい。

四大公爵

「それで、アーちゃん。その後どうなったの？」

「どうもしなかったよ。ちよつとしゃべって会長さんが去って行っただけ」

「何もなかったの？」

「ん、別に何も。ただまあ、帰り方がちよつと変わっててね。屋上から飛び降りて帰って行っただよ」

「へえ」

『ちよつとしゃべった内容』ってのは、言うなれば侘び……だった。

午前中にした自分の不手際を詫びるもの。だから、俺とララは絶対にそれは嘘だと思った。だってそうだろう、あの会長が自分の非をそう易々と認めるものか。教師に怒られたか、またはそれに準じるもので彼女がすぐに詫びるだろうか。

否。

十中八九、何か考えているが、それを読みきるまでは至らず。そこまで頭回らないし、ララも「あの女は、姉ちゃんも相当怪しんだな。先が読めないとかで」と言っていたし考える方が無駄といえる。

だから、無意味な詮索はやめよう。そう結論づけて終わった。

そして学校に帰って天才画家ことユナに夜ご飯を届けて今に至る。時刻は夜。

銀色とブルーサファイア、二つの月が窓から見えるこの夜空は、

何気にお気に入りだったりする。

「っていうか、アーちゃんの周りって凄いね。四大公爵のうち、三つも身近にいるなんて」

「身近っていうより纏わり憑かれている感じだけだな。それにそのうち一つはユナと同じ幼馴染だろ」

「あいつなんて、知り合いと思われるだけでも不快だよ」

……ん、相変わらずユナとあいつは仲が悪い。近く会ってないし、何やってるかな。

俺の幼馴染は四人いるんだけど、そのうちの一人があいつだ。おそらく、今頃公爵家としての仕事を一生懸命やっていることだろう。自慢のすわ口調で。

んで、話は戻すが四大公爵のもう二家が今日会ったイリア会長と、最強女ことララ。こうして考えると確かに凄い。普通、庶民が公爵家と関わること自体がありえないのに三家も、とわね。

「全部揃うまであと一歩だね」

「揃わないことを祈るよ、死ぬほど勘弁してほしい」

そう言つて、隣に座っているユナはコトツと自分の頭を俺の肩に置く。『充電』の次に彼女が好きなやつだ。そうやって目を瞑る彼女の頭を撫でながら外を見ると、二つの月の間を偶然か、流れ星が走りゆく。

ああ、願わくば。これ以上公爵家とは関わりをもちませんように。凡人たる私には、重すぎる重圧にございます。

「昨日言つてた一回生の子、どうやら四大公爵のやつらしいぜ？」

「よし、全力で逃げよう」

グルリと方向転換し、可能な限り早足で帰る俺の首元を右手で掴まえるララ。

あれから時間は次の日を迎え、昼。学校にある食堂でのんびり男子連中と飯を食っていたらズカズカと登場してきたララに拉致された俺は、現在広場にある噴水前に来ている。

ちくしょうと愚痴りながら拉致される直前に掴んだパンを食べていると、ふと急にララはそう言ったのだった。

……おかしいな、昨日確かに流れ星に祈ったはずだけど。三回祈らないとやっぱ駄目なのかなあ。

「嫌だ。これ以上公爵家には関わりたくない」

「別に減るもんじゃあるまいし！ 今更何よ」

「馬鹿かお前。公爵様の逆鱗に触れたらうちみたいな凡人病院、即効で潰されますぜ。可能な限り触れないようにするのが『普通』だろっよ」

「お前、あたしと『普通』に話してるじゃん」

「ララが無理矢理やって来るからだろ！ 今みたいな方法で！」

まあ！ とオロオロしながら崩れ落ちる化け物女。うぜー。

いや、もう彼女に対して怒ることは砂漠に水を撒くようなものだ。意味がない。叱つても三歩歩けば忘れすぐさま別の行動を起こす無尽蔵の活力に実行力はさながら変人の化身……。もうちょっと正しい方向へ歩みを変えればきっと皆から喜ばれるのに。

それも彼女の魅力の一つかもしれないが。巻き込まれる身としてはたまったものではない。

「ってか、昨日お前言ってなかったか。その子北の『ジャルトオ』地方から来た……って」

「うん、身体が弱いらしくてさ。空気が綺麗なことで有名なジャルトオにいたらしいんだけど、勉学のためにこっちに戻ってきたんだってよ」

「勤勉なこと……」

今日の朝方、一回生も気になっていたであろう試験結果の発表がなされた。

当然自分の結果を見に一回生の群れが雪崩れ込むが、自分の結果よりも目に付く光景がそこにはあった。同時に、それは二回生以上の学生内で噂として流れていたこと。

【Z】判定所持者がいた。

所詮は噂だったので、半分冗談とは思っていたが実際に発表されるとその事実は一瞬の間に広まった。

俺たち二回生も、朝からそのことで皆がずっと話していた。昼飯の際も男子連中と一緒に俺もその話で盛り上がっていたものだ。どっかの誰かに拉致されたけど。

けど、本当に出るとはな。百年に一回程度だからこれは相当だろう。俺の時でもそれは凄かったのを憶えている。噂の【Z】くんを人目見ようと廊下に人だかりが出来たほどで……。

「だからよ、きっとその子もアルトと一緒に不安になってると思うんよ」

「おい待て。不安にはなってなかったぞ。ある程度の覚悟はしていたし」

「ゆえに、あたしと一緒に励ましに行くのが最上だと思ったわけね」「聞けよ人の話！ って袖を引っ張るな、伸びるー！」

グイグイと、とても女とは思えぬ腕力で俺の袖を鷲掴みにして歩くララ。

やばい、これはやばい。

これ以上公爵家に関わるのは……特に理由はないけどやばい気がする。良いことが起こる材料が何一つない！洒落にならん！

「面白くなってきたね、アルト」
「どこがぁ!？」

噂の一回生

——いない？

「あ、はい。彼女、昼休みになった途端どこかに行ってしまった」
「賢明な判断ね。一年前自分の立場もわからずボケーと座っていた
どっかの二回生とは大違い」

「いやいや、あれには俺の緻密な計算があっ」

「それでどこにいるかわかる？」

「す、すいません。そこまでは……」

そう言つて、一回生の女の子は頭を下げる。

廊下を見れば、一回生を中心に首を長くして見ている生徒たち。

中には二回生以上の学生もちろほら見える。ホント、暇な連中だこと。天下のザヴェード医術学校が聞いて呆れるわ。

「ははん、全然気にしなくていいよ。むしろあたしはあんたの笑顔
が見れてラッキーさ」

「え、あ、あの」

呆れるわ！

で、と。

あれから散々昼休みを使って校内中を探し回ったが、結局見つからなかった。いくつか目撃情報はあったものの決定的なものは見つ

からず……。というか、ちょっと変だったのが「途中までは見た」という証言がほぼ大半だったことだ。

どういうことだろう。

疑問はあるものの、俺はそっちよりこっちの方が気になるのだが。

「あ、あの、ララ先輩！」

「ん？」

「握手……してもらえませんか？」

この最強女、モテモテなのである。

それはもう、話した女子ほぼ全員が彼女にアプローチをかましてくるほどで。さすがに好意はないのだろう。どちらかといえば『憧れ』に近いものがある。

一回生にとつてみればララはカリスマ的存在だ。確かに頷けるが、問題は別にある。

「えと、すみません。そこ、どいてもらえませんか」

「え？」

「貴方が邪魔で、ララ先輩が見えないんです」

俺、どんな目で見られてるんだろう。ボディーガードか、はたまたファンの一人か。

周りからはひそひそ声で「あの誰？」「何か寄生虫みたいに近くにいるよね」と散々な言葉で噂され。耐え切れなくなりさつさと逃げようとする俺だが「やだもぉ」と気色悪い女声を出しながらララは俺の裾を掴む。

その時の腕力たるや、前世のコンボイを連想するかの如く。

っていつか裾だけじゃなく肉も掴んでるんですけど。もぎ取られるかと思っただんですけど。そうこうして、昼休みは終わり、午後の授業の後、時間はまたまた夕方となる。

シチュエーションが昨日と似ているような気がする……。

「今日から授業だったのに。全然集中できなかった」

「ははん、それはあたしのせいじゃないさ。アルトのやる気の問題さね」

「うるせー。つたく、もう俺は付き合わないからな。今日もさっさと帰って復習しないと」

「凡人はこれだから」

「黙れ化け物」

二人がいるは屋上……また？ 昨日も確か……。まあいいや、話を戻そう。

午後の授業が終わり次第すぐに一回生の噂の彼女がいるという教室に向かうがすでにおらず。しかし今終わったばかりというのでラが「何とかなる」と騒ぎ校内中を駆けずり回るが……そもそも、俺とララ。大変今更であるけれど。

彼女の顔、知らないんだよね。

となれば当然、誰がその子なのかもわからず。

「無意味ここに極まるって感じた」

「無意味じゃねえよ、無駄って言うんだよ」

「やかましい！」

数分後、ララもようやく飽きたのか、あくびをしてから屋上の扉に向かいだす。

その様を、やれやれとばかりに見送る俺。

「あれ、アルト帰らないの？」

「もう少しここで休んでから帰るよ。お前のおかげで結構疲れたかな」

「ふん……迷惑だった？」

「いつものことだろ。今更だ」

「ははん、と笑みをみせて彼女は出て行く。

ああ見えても中身は一応（本当に一応）女の子だ。友達も欲しいだろうがレベルが高すぎてクラスの連中はあまり話しかけに行かないと聞く。基本的に俺のところへ来るのもそういう理由があるのかもしれない。

年頃の女の子が難しいのは、この世界でも一緒か。

いや、単純に俺に女の子スキルがないだけなのかも。……さて、と。

ララに関しての考察はひとまず終わり。ここからは、別の人物に對して、だ。

「——“シャングリラ”」

「——！？」

パキィィ……ン！ と何かが弾け、そして連結する音が鳴った。

場所は屋上の角。俺とララがいた場所から右端つこのところ。俺はそこに近づいて、一人しかいないはずの屋上で——

ララとは違う、一人の女性と対峙する。

「どう、して」

「小規模の空間と空間を切断し、そこに一時的に入り込む魔法……かな。俺ら十代の連中じゃまず扱えない魔法だな。これなら後ろから追ってきた連中からも身を隠せる。大した魔法だと思う」

「貴方、何者……。いえ、それよりもどうやってこの魔法を」

「【Z】判定の二回生」

「!？ ……貴方が」

正直言つと、俺が今やったことが出来たのは本当に『たまたま』だ。

たまたま俺が扱える魔法の条件に合っていたから、彼女の魔法を見破ることが出来た。まあ、その魔法が俺を【Z】判定所持者に認定させる原因になったんだけど。

ただ、これが彼女をZ判定へと認定させた魔法だとは思えない。上級、もしくは特級魔法とは思うがやろうと思えば習得できる魔法だ。ザヴェード医術学校のZ判定は、そんな者に授与される制度ではない。まず普通の者には出来ない魔法や能力を所持している者だけが与えられるもの。

ゆえに百年に一回出るか出ないかとされる。

つまり……。

「アルト・シャーロックだ。よろしくな」

「死んでください」

「……」

彼女が、俺と同じ“伝統魔法”を扱える者だということ。

いやあ、やっと明日から普通に医者勉強が出来そうです。よかったよかった。

あ、そうだ。別に大したことじゃないんだけどさ。

「よ……よろしく、ね？」

「消えてください」

泣いていいだろうか。

医術学校の十二科目

さて。

医者 of 学生でありながら、最強美人に振り回されたり、総会に推薦されたり、【Z】判定所持者の一回生に会ったりと……。まったく医術学校の生徒らしいことをしていない自分。

といつても、ここ二日だけのことなのでそんな大げさに言うこともないが。

それでもやっぱ、学生なので。勉強が一番だと思うわけで。

「勉強勉強！」

「とか言ってるわりにアーちゃん目が真っ赤だよ。どうしたの？」

「うん？ いやー昨日ちょっと後輩から痛撃な二言を頂戴してね。なかなか言われない言葉だったから、結構心に『くる』ものがあつてさ」

「変なところで繊細だよな」

「やかましい」

三日目の朝。

いつも通りユナに朝食を渡して、学校へ向かう自分。今日を終えれば明日と明後日は休日だから、ちょっと気が楽だ。そう言えば前世では土曜日と日曜日は休みだったな。あ、でも土曜日は学校によって休日だったり午前中まで授業だったりで違うんだったか。

この世界では、そういう決まりがなくて、だいたい一ヶ月前に学校側がスケジュールを公開する。

年に三回の試験以外は、毎年スケジュールが変更されるのでチェックは怠れない。

昨日から授業も再開し、また勉強漬けの毎日がやって来る。

しんどい……といえば確かにそうだが、目指しているものが明確なのでまあいいかな。一生懸命勉強すれば実力もそれに比例してくれるし、何より夢に向かって歩いてるな〜って思えるのが心地良い。

「とか言って、あんた試験結果『中の上』程度じゃん」

「……」

最近、この化け物女は読心術の使い手ではないかと思う時がある。どう考えてもこの流れは回想に近く、俺の心情を的確に描写するシーンである。学校の門を通り過ぎながらいつの間にか横にいる最強に話しかける。

「心が読める魔法でも使ってたの？」

「うんにゃ。アルトの顔見たら『ああ、こいつ今夢に向かって妄想に耽ってるんな〜』的な顔してたから」

「どんな顔だよ……って」

「？ どった？」

ふと前を見ると、一人の女の子が立っていてこちらを見ていた。

腰まである茶色の髪に、赤眼鏡。肌が白いのでその赤がとても似合っていて知的な印象を与える。身長は女子の平均ぐらいで落ち着きある佇まい。図書館で本でも読んでいれば充分絵になることだろう。

が、そんな素敵絵を吹き飛ばすぐらいの目つきで彼女は俺を見ていた。

「お、おはよう」

「話しかけないでください。頭が悪くなります」

グッホオ。これは効くぜ……！

昨日の死んで、消えてに加え、新しく話しかけないでがエントリ
ーされました。心底精神的にダメージがきます。あ、でも不思議だ。
慣れてきている自分がいる。適応力高いなあ。前世記憶持ちだから
かな。

断じてMではないですよ？

ホントだよ？

「アルト、この知的少女は誰よ？」

「お前が昨日散々探していた少女だよ」

「！？ 何だと！」

グリーンと頭をこちらから彼女に向けて、ランランと目を輝かせる
ララ。

ようやく目的の人物と巡り会えたからか、テンションがうなぎ上
りとなっている。……ただなあ、参ったな。こういう子にとって、
ララは苦手な部類に入るんじゃないだろうか。

そう考えると、この二人はあまり会わせちゃ駄目かもしれない。

「ララ・アディエマスだ。よろしく！」

「シャル・ロワイネックです。よろしくララ先輩」

「うあい！ 明らかに態度が違い過ぎるだろ！！」

「だから話しかけないでください。病気が蔓延します」

さて……うん、大丈夫。

俺には勉強があるから。そうだよ、私、本業は勉強なのです。大
丈夫大丈夫。

飯に一回生の女子から嫌われようと、蔑まれようと、見下されようと、大丈夫です。……だい、じょうぶ、です。

「おいどうしたアルト、泣きそうな顔して。体調でも悪いのか」

「あ、大丈夫です先生。ちよつと気分が悪くて」

「ん、ならいいんだが」

いいのかよ。気分悪いんだけど。

もうあれだな、今更彼女から何言われようと鉄壁の心で守り抜くしかない。これから先ああいっ患者とも会っ可能性があるんだから、いい勉強になったと前向きに考えよう。

よし、ここらで医術学校の勉強について回想しよう。

以前も紹介したが、この学校で一・二回生のカリキュラムは全部で十二科目存在する。三回生になると五科目増えて十七科目だ。ここでは十二科目を説明する。

って言っても全部は大変だから大まかな感じで。

大きく分けると三つに分類できて、『医術』『学業』『体力』という感じ。医術はこの学校のカリキュラムで一番割合が高く（当たり前だけど）それに重点を置く生徒が大半だ。

学業は以前も紹介したが、この世界での歴史や地理、語学、数学なんかもある。

んで、残りの体力が前世でいう体育の授業みたいなもん。

何となく予想は出来るけど、体育の授業は皆悪い。対し、騎士学校は体力重視らしく、学業が悪いそう。ただこれは学校の方針としては当然の結果らしく、逆にこの学校では体力の成績が良くて他が悪いと笑われることがあったりして。

まあ、俺がそうなんですけど……。一応言っとくけど、ちゃんと

勉強してるからな！ さぼってないぞ！ ただ、ちょっと勉強が他の生徒より低いだけだ。そうなんだ、そうなんです。

以上が十二科目の大まかな回想になる。早っ。

詳しくしてもいいけど、それは機会があつたらしよう。今みたい
に、ね。

現在受けているのは、学業の中で歴史を管轄する『医人歴譜』。
ザヴェードやもう一つの大国アシランとの歴史を勉強するが、同
時に医学の歴史も勉強する。ここが重要で、医学の歴史を学ぶのが
結構大変なのだ。

何せ、そこは魔法と賢者と医術の舞台。

憶えるのも一苦勞で、まるで世界史のメソポタミア文明をダイレ
クトに勉強している気分になる。

「はい、ここテストに出るかもしれないかもしれないよ」

補足。先生も、大体普通じゃない。

学級委員

「終わったあ」

人生が、ではない。人生を終えることなら既に一回経験済みだ。授業が終わった。

『医人歴譜』は国・医療の歴史を学ぶものだが、慣れてくれば世界史みたいなもので。後は暗記ものだとか割り切ればどうということはない。そういえば、前世では勉強しているとよく「こんな勉強が将来役に立つわけがない」と考えたものだ。中学・高校生なら誰もが通る道だと思う。実際、それが本当に役に立つのかどうか、証明する前に死んでしまったのだが……。

今、それを考えると、答えは「役に立つ」だと思う。

世界史を勉強していたことで、英語の起源となるラテン語を用いていたローマ帝国に興味をもち、そのおまけという感じでラテン語も個人的に勉強していた。

そして、そのラテン語知識が、以前回想した天才画家ことユナの二つ名に繋がった。この世界で画家のことを「ピクトウ」、ラテン語で絵のことを「ピクトウ・ラ」。実際、大したことではない。むしろ無駄知識と同じだ。

けれど、それがもとで今の世界と前世の世界を『視る』事が出来る。

ちよつと、得した気分である。

「その程度のことだが、死んだ後にわかるってのが皮肉だよな」

「どこが皮肉なの？」

「まあ俺の前世が……つてえ！？」

ガバアツと後ろを振り返ると、ニコニコしながら椅子に座っている俺を見下ろす女の子がいた。

可愛い。

素直な感想だ。とても可愛らしい顔をしている。くせつ毛のある黒髪が無造作に二つ、三つ飛び跳ねているがそれもご愛嬌といったところか。ショートのようにでありながら、後ろ髪は首まである、変わった髪型をしている。ただ、その愛嬌ある笑顔が我がクラスにおいてダントツの人気を誇る。

以前も言ったが、この学校での男女比率は男：7に対し、女：3だ。一クラスにすればおおよそ三十人の中でたったの九人しかない。これは由々しき事態である。我が五組も三十一人で女の子は十人。平均よりはやや上であるためか他のクラスから嫉妬と羨望の眼差しを受けることもままある。

正直言つて、うちのクラスの子は皆、可愛い。

うん、生きててよかった。

そんな我らが花園の楽園、五組の代表を務める女の子が彼女だ。

前世でいう、学級委員と同じポジション。この世界ではクラス代表のことを『シエルン』と呼ぶ。

五組のまとめ役にして笑顔が素敵な女の子、キャロット・モンチユーリ。一回生の時も同じクラスだったこともあって、彼女からはアルくん、俺はキャロと呼んでいる。

「ビックリしたぜ。キャロか」

「ういうい。元気かいアルくん？」

「あんま……な。でも珍しいな、キャロから話しかけてくるなんて

「さ」

「ん、まあそうだね。ちょっと用事があって」

そう言つて、えへと笑うキャラ。どちくしょう、可愛い。
が、それは同時に……

「――！？」

「？ どうしたのアルくん？」

殺気。

クッ！ やはり五組の一番と話すだけでもこれか！

後ろから見るまでもなく、尋常ではない殺気を感じられる。つい先ほども述べたがキャラは可愛い。五組の一番人気だ。ゆえに当然ながら彼女を狙う男は多い。しかも、これに拍車をかけるが如く。

キャラには、彼氏がいない。

うっかり俺が二回生の最初の頃に聞いたのが仇となり、露見してしまったのだ。それからは男どもが水面下でキャラ争奪戦を繰り広げているとかいないとか。

かっこいい男子、可愛い女子は基本、一回生の頃にカップルを成立させている。

故に我が五組の女子も大半が彼氏持ちだ。それはいい、当然のことだしむしろ納得できる。が、彼女に……キャラに彼氏がいないことが問題なのだ。

「え、と……ね。アルくん」

おお、このような殺気全開のクラス内でもマイペースに話します

かキャラットさん。

……ん、いや待て。このキャラ口無双を考慮に外してもだ。そういうや何でキャラ口は俺のところへ来たんだろ。何か用事あったかな。

いや、今月は総会の選挙以外、特に用事はなかった。

つまり……つまり？ 何だろう？

「次の授業、何か知ってるかなアルくん」

「ああ、そりゃあ。『手術』だろ？」

「ういうい、正解だね。そんでね、基本手術って二人一組でしょ？」
「……」

まずい。まずまずい。まままずまずいいい。

どう考えてもその流れは可笑しくないですか、え、だってそんなの周知の事実じゃないか。十二科目『医術・学業・体力』の中で医術の分野である『手術』。文字通り、切って裂いて縫ってにやんにやんの派手な科目。医術を目指す者にとって、当然ながら避けては通れない道。

そして、俺が去年……Z判定をもらった科目。

もう受ける必要はないのだが、それでも個人的な理由で受けている。

その理由は今は置いとくとして、だ。本当まずい。この流れ、どう考えても……！

「アルくんの相方、今日お休みだよね」

「んん！？ ああ、そうだったような気がする」

「でね、私の相方の子も今日はお休みなんだ。女子って十人だから私余っちゃって」

「……おお」

「だから、さ。……えとね、何だか面と向かって言うの恥ずかしい

なあ。えへへ。えとね、アルくん」

……！ いや、大丈夫だ。わかった。キャラが言いたいことはもうわかったよ。

だから言わなくていい。全然、言葉にしなくていい。俺もそこまです馬鹿じゃない。前世のラブコメ漫画みたいな鈍感な主人公じゃない。

大丈夫だ、わかる、余裕でわかる。でもこの流れ、キャラのことだから変な誤解を生む発言をする可能性が極めて高い。この子、案外トロいんです！

だから！ それ以上は！！

「キャラ！ わかつ——」

「次の授業、私と付き合ってくれないかな？」

瞬間、後方より定規×8が投げられました。
全部、後頭部直撃でした。

真夜中の邂逅（前書き）

最後に「後書き」がありますので、お読み下さいますようお願い致します。

真夜中の邂逅

「……アルくん、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと痛かったけど、所詮は定規。抜いてしまえばどうってことはないさ」

「まだ刺さってるけど」

「おんどりゃあー!!」

グサリと、残り一本頭部に刺さっていた三角定規をもぎ取り開いていた窓に向けて投げ飛ばす。放物線を描きながらそれは手裏剣のように回転していった。

くそう、まだ後頭部がチクチクしやがる。小さい頃から「傷がお約束」みたいなことばかりしていたから多少、身体は丈夫だがさすがに八本はやばかったぜ……。そのうち日が増すごとに殺傷能力が高めのやつに進化していきそうで怖い。吹き矢とか出てきたもんなら、もはや逃亡するしかない。

頭を触りながら隣にいるキャラ口に質問する。

「それで？ まだ彼氏は出来てないのか？」

「んゝそだねゝ。簡潔に言っちゃうと……えとゝ」

「出来てないと」

「ういうい。アハハ、参ったね」

ちよつと恥ずかしそうな笑みを浮かべて、キャラ口は歩きながら外を見る。

今日も空は綺麗な青空が広がっていた。雲一つない見事な蒼天。まるでキャラ口自身を絵にしたような素敵な空だった。

現在、俺とキャロは二人で「手術演習室」に向かっている。もちろん、デートではなく五組の学級委員である彼女のお手伝いとしてだ。次の授業は『手術』。

こちらで一つ、手術について触れておこうと思う。

授業内容は文字通りであるが、前世の世界との相違点は手術中にも魔法が入り混じることにある。

が、魔法を組み込んだ手術の授業は三回生になってからだ。より実践的になるにはまだまだ二回生は実力不足と位置づけられている。

もつと言えば、目差す分野毎に内容も変わってくるものだ。

今日休んでいる俺の友人である彼は、以前にも登場した通り「産婦人科」を希望としている。となれば、それに関する専門手術といえば出産に関わるものだ。「眼科」を目指している者であれば当然眼球に関わるものに。それぞれ、希望科によって手術の授業は大きく異なってくる。

けれど、まだ俺たちは二回生。

進路が確定していない生徒が大半であるため、二回生が学ぶ『手術』はおおよそ医療を志す者にとって共通するものでなければならぬ。

簡単に言えば、身体を「切る」「開く」「診る」「縫う」ことだ。二回生である俺たちは、まだ実際に人の身体をそうしたことはない。慣れるために小さい生物や動物から始めるのである。

実家が病院をやっている俺からしてみれば、もう本番を経験したこともあるのだけれど。普通の生徒はそんなこと、まず経験しないもちろん、免許をもっていない俺も親父や母さんの手伝いをする程度で、国から許可証がない限り手術を行ってはいけないのだ。

ただ、俺は免許はないけど手術を行うことなら出来る。魔法を使えば、であるが。

学校の十二科目の一つである『手術』は回生が上がるにつれて内容の質も上がっていき、四・五回生となればそれ相応のものになってくる。

今日は死んだ小動物を開き、先生と一緒に中の臓器を確認していく授業だ。なかなかグロイものでもあるが、それが将来俺たちのする仕事に繋がっていく。医者になるということは、そういうこともある。

医者についてちよつと感慨深い思いに浸っていると、キャロが覗き込むようにして俺の顔を見てきた。

慌てていつもの表情に戻し、何事かと問いかける。

「あのさ、ずっと気になってたんだけどさ、聞いていいかなアルくん」

「ん、何？ 今日の授業が怖くないのとか聞くんじゃないだろうな」
「まさか。んゝ本当、今更だけどね、何でアルくん、この授業受けるのかなって思って」

「……」

「だってね、アルくん、去年この授業【Z】判定もらったでしょ？
ってことは卒業するまでの五年間、もう手術の授業を受ける必要ないってことだよな？ 私たちはSゝEの判定を卒業するまで年に三回、必ず取らないといけないけど、アルくんは違う。なのに何で【Z】判定もらった後も受けるのかなあって思ってたさ。……えと、失礼だったかな？」

夜。

あと一時間もすれば時刻は次の日になってしまふ時間帯。銀とブルーサファイアの月に、満天の星空が天を彩る。さすがにこの時間帯となれば、ほとんどの人が家に戻り就寝の準備をしている頃合だ。天才画家ことユナに至ってはもう寝ていることだろう。

坂を下っている。

地形的に一番盛り上がっているザヴェード領域内の東にある医術学校から俺の家がある城下町に戻るため、帰りはいつも下っていくことになる。と説明してもちよつと分かりづらいので、少しだけザヴェード王国内に触れておこう。

以前に紹介したことも含まれるが、この王国は四方八方、十六方城壁で守られている。わかりやすく言えば、一つの大きな円を想像してほしい。それをザヴェード王国としてもらって、その中に大きな円の三分の一ぐらいの円を北西に描いてほしい。それがザヴェード城の領域だ。残りの三分の二が国民の住居やギルド、酒場、貿易市場……つまり、城下町である。

三分の一ぐらいの円がザヴェード城の領域で、北にお城と貴族街が。東に医術学校が。西に騎士学校が。南に魔法機関が建てられている。ザヴェード四大箇条はこの円にて形成されている。

よく、北西から攻められればまずいのではないかと旅人に聞かれる時があるが、北西の城壁の先にあるのは崖なのだ。さらにいえば、そこから先は海が広がっている。ゆえに大きな円の西には前世でいう魚市場があり、新鮮な魚による取引が毎日行われている。

他にも、東には武器・防具、装飾品、アクセサリといった職人街があつたり、南は本や物品……つまり貿易を主とした大規模サミットがあつたりする。王国の中心には巨大な噴水や、名物ともされる時計塔もあつたりして。

全部説明すると大変だから、機会があれば順応に説明していきたい。

「真っ暗だな。ちょっと残りすぎた」

今日は、図書室で閉館時間まで勉強していた。

理由は簡単で、俺の苦手な歴史や、この世界における地理の勉強だ。暗記ものと以前割り切っていたがやっぱり苦手だったりして。人体の構造なら家の手伝いをしていることもあって大体知ってるんだけどなあ。

「なんで『手術』の授業、受けてるの……か」

ふと、空を見上げる。

相も変わらず綺麗な夜空。もしかしたら、この星空の中に地球があるのかもしれない。いや、そもそも時空が違うのかもしれない。考えるだけ無駄かも。

キヤロから質問された、何故【Z】判定をもらっているのに手術を受けているのか。

答えは簡単だよ、受けたいから。

一回生の最初の試験の時、大きなハプニングに見舞われて、俺は「発動しないと決めていた」魔法を使った。それはシャーロック家に伝わる“伝統魔法”。

何故、使わないと決めていたのか。使ってしまうと【Z】判定を喰らうのは容易に予想できたからだ。こと手術に関し、この魔法は反則に近い。もちろん完璧な魔法ではないから、色々と条件もあるし、どんな相手でも救える魔法でもない。

ただ、繋ぐだけだから。

けれど、その魔法を使ってしまったから、しかも手術の試験中に発動させてしまったから、もはや言い逃れが出来なくなってしまう、あの判定をもらってしまった。親父も爺ちゃんもそれが嫌だったから試験の時は絶対に使わなかったそうだ。

悔いた。

それはもう、たくさん悔いた。

あの魔法を使えば、おおその手術には対応できる。けれど、それはズルだ。頼ってばかりいると、当たり前のが出来なくなつて、基本も忘れてしまふ。それだけは嫌だ。もはやそんなの、医者としての資格がないのと同じだ。

だから俺は手術の授業を受けている。魔法を使わずに。あれは緊急の際で充分。

「って説明しても、なかなか理解してくれないんだよなあ」

はあ、と独り言を呟き、頭を垂れる。

医者を目指す者なら、皆が羨ましがる魔法だから無理もない。

「っていかん！ またネガティブな思考に入ってしまうところだった。まったく、情けない」

止めだ止めだ。別にあの魔法を嫌ってるわけじゃないし、むしろ感謝している。

感謝してるけど、頼ってばかりじゃ自分が怠け者になっちまうから、普段は使わないよう努力しているだけのこと。それだけさ。

変に考えちまうから負のスパイラルに陥ってしまうんだ。前世でもそんなこと多かったなあ。

うし！ 気持ち切り替えて！

ここ三日間、俺の周りにいる人間はおおよそ会った気がする。

まあ、幼馴染四人のうち、三人とは会ってないけど。その代わり何故か四大公爵の二人と接触することになった。今後も接触する可能性はあるはあるが、一回生の子には嫌われてるし、会長とは極力……というか全力で避けていれば問題ないな。ララは無理だろう。あっちから来るし。

他には、キャラを始めとした五組の皆。定規とか投げってくるけどいい連中だ。ノリがいい奴も多い。

そんな感じかな。正直言えば、治安部隊の酒好き魔女とか、魔法機関の変態ババアとか色々いるけど、機会があった時に説明すればいいだろう。日常生活を送っているうちによく関わりをもつのが幼馴染の四人が医術学校の面々だ。

本当、変人ばかりの連中だと思う。自分もだけど。

そうして、今日も終わりだ。

明日から二日間の休日。久しぶりに外出しようか、それとも幼馴染の一人であるファラがいる酒場に行こうか。そっぴや新しい本が入荷したと本屋のおっさんが言ってたな。見に行こうか。

……うゝん、悩みどころだ。でも、楽しい。わるくないね。

目の前の角を左に曲がれば、五分ぐらい歩いた先に我が家が見えてくる。

明日、どうするかは寝ながら決めよう。大好きな星空を見ながらゆっくりまったり考えよう。色々悩みもあるけれど、それ以上に楽しいことがあるんだから。二回目の人生、楽しくいきたいさ。

そんなことを考えて、今日の終わりをちゃっかりまとめて、俺は角を左に曲がる。

「……………」

すまない、先ほどの回想、若干の修正を頼めるだろうか。
修正部分は、『ここ三日間、俺の周りにいる人間はおおよそ会った』である。

一人の女性がいた。一人の女がいた。
スーツを着て、黒帽子を被った、スタイルのよいスレンダーな女性がいた。いた。いた。

「はちにんこ」

その言葉、眼前の光景と相まって、まったく意味がわからなかった。反対から読めば意味がわかるなど、この時の俺には不可能だった。出来なかった。真っ白になった。理解、できなかった。

——コツ、コツと歩み始める女性。

こちらに向かって歩いてくる女性。あ・る・い・て・く・る女性。

「さだけだんないせうこんで、したわ」

彼女は、何故そんな狂った話し方をするのか。間違いなくワザとだ。それ以外考えられない。目の前にある光景と、かけているのだ。

反対であると。逆であると。逆さまでであると……！

女性の頭の位置は、俺と同じだった。身長173センチの俺と、同じ位置にあった。

首は、なかった。

体は、なかった。

足は、なかった。

——頭から、下には。

「……」

本来、首・体・足は頭から順に下から繋がっていくものである。当然だ、世の理だ。

だから、最初目の前の光景がわからなかった。理解できなかった。意味不明すぎて、パニックを通り越して啞然、呆然となった。

彼女の首は、ある。体も足も、ある。

——頭から、上に。

首は、頭の上に。

体は、首の上に。

足は、体の上に。

単純に言えば、彼女は、宙を、浮いているのだ。逆の状態で。

一瞬、紐が何かで吊らされているのかと思った。足に縄をくくりつけて、ブランブランと宙に浮いていると思った。けれど、そんなものはない。

彼女は、浮いているのだ。反対に、逆に、逆さまに。まるで、重力のベクトルを間逆にしたように……。頭の位置を俺と同じにして、その女性はそこにいた。いた。いた。

——コツ、コツと歩いてくる。

床など、身体を支えてくれるはずであろう地面がないのに歩く音を鳴らしながら、彼女は歩いてくる。

真夜中の坂道。誰もいない夜の城下町。本来点いている街灯も消えて。人間も動物も生き物も空気も大気も空間も。何もないように感じた。

「ねくしろよ」

その女性とのファースト・コンタクトは、真夜中での邂逅だった。逆さまの、ね。

真夜中の邂逅（後書き）

初めまして、作者のヤマタカです。

区切り、といいますが章の終わりということで本来一話2000字程度を、今話では6000字に。

まだまだ登場する人物が結構いるのですが、この章では『一通りの登場人物たち』を出すということで。確認しますと、幼馴染四人に、四大公爵、医術学校の面々に、今話で最後に出てきた女性です。

それに騎士学校や魔法機関、ザヴェード王国が交わったりして、医者勉強をしながらアルトがドタバタ・ほのぼのと過ごしていく物語です。

最後に、お気に入り登録・評価・感想をして下さいました方々へ。真にありがとうございます。この場を借りて、深くお礼申し上げます。

次章より、イリア会長や騎士学校が登場してきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859y/>

異世界でお医者さん目指します。

2012年1月4日18時12分発行